俳句雑誌『雪』とブラジルハイカイの関わり
――増田恆河の季語論を中心に――

白石佳和

一　問題の所在―俳句雑誌『雪』と増田恆河の関わり

『雪』は、一九七七年一〇月、新潟県亀田町（現新潟市）で創刊された月刊俳句雑誌である。二〇二二年二月に通巻五三三号が発行されている。主宰の選句・句評、主宰の巻頭言、同人の投稿記事・たよりなどから構成される一般的な俳句雑誌である。新潟を拠点とする地方の俳句雑誌ではあるが、創刊当初から日系ブラジル人が数十名所属していた。『雪』は高野素十（一八九三～一九七六）が主宰した俳句雑誌『芹』の後継誌として創刊された。ブラジル最大の俳句結社『木蔭』を主宰した佐藤念腹がブラジル渡航以前に高野素十と親しく、その縁で『芹』に所属していた念腹門下のブラジル日系俳人が合流したのである。[1] その一人に増田恆河がいた。

増田恆河（一九一一～二〇〇八）は一九一一年香川県に生まれ、一九二九年（十八歳）に家族とともに渡伯した。一九三五年（二十四歳）よりホトトギス派俳人の佐藤念腹に師事し、五〇年間日本語で俳句活動を行なった。一九八七年（七十六歳）からグレミオ・ハイカイ・イペー（イペーハイカイ同好会）の創立に関わり、季語を取り入れ五七五の定型を守る有季のポルトガル語ハイカイ（ポルトガル語の俳句、以下ブラジルハイカイ）を提唱した。二〇〇四年には国際ハイクへの貢献が認められ正岡子規国際俳句賞を受賞している。代表的な著書に、日本語歳時記『ブラジル俳句・季語集　自然諷詠』（サンパウロ、日伯毎日新聞社、一九九五年）、ポルトガル語歳時記『*Natureza-Berço Do Haicai Kigologia e Antologia*』がある。[2]

ブラジルでは長い間日本の移民による日本語の俳句（以後、日系俳句）とフランス経由でもたらされたブラジルハイカイが並立していた。その後日系俳句の花鳥諷詠の考え方がブラジルハイカイに持ち込まれた「日本文化の新展開」（久冨木原二〇二〇）があったことがブラジル国際ハイクの大きな特徴と

して指摘されている。[3] その新展開のキーパーソンであったのが増田恆河である。

ブラジルの俳句の先行研究として細川周平（二〇一三）と藤原マリ子（二〇一二）があるが、日系俳句側の視点からの考察であった。[4] これまでブラジルハイカイについての日本語資料は、恆河が『俳句文学館紀要』四、八、九号に寄稿した一連の論考のみであった。

筆者はトイダ・久冨木原が指摘する新展開の有季ブラジルハイカイの特徴をさらに明らかにするため、拙著（二〇二一a、二〇二一b）で増田恆河の日本語歳時記とポルトガル語歳時記を比較・分析した。[5] その結果、日本語歳時記と比較してポルトガル語歳時記では、日本特有の詩情・感覚を持つ季語（山笑う、うららか、「子規忌」などの忌日）が恣意的に取り除かれ、季語解説にブラジル的な詩情・感覚を記述する努力が見られることを明らかにした。日系俳句の日本語歳時記からポルトガル語歳時記を編纂する過程において季語論の変容があったことが確認できた。

さらに、増田の活動の資料を収集する過程で、増田恆河が創立当初から参加している日本の俳句雑誌『雪』にグレミオ・ハイカイ・イペーでの活動の様子がうかがえる記事が多く掲載されていることに気づいた。そこで本稿では、『雪』で得られた情報をもとに増田恆河のグレミオ・ハイカイ・イペーでの活動、特に季語論形成における思想の変遷過程を分析しつつ、『雪』が有季ブラジルハイカイに与えた影響について明らかにしたい。ブラジルの日系俳句界にホトトギス派の伝統俳句を根付かせたのは、「畑打って俳諧国を拓くべし」という餞の俳句を高浜虚子から贈られた佐藤念腹である。そして、その伝統俳句をポルトガル語のブラジルハイカイに「移植」したのがほかならぬ増田恆河であった。

二　『雪』と村松紅花、増田恆河の関係

『雪』創刊号巻頭は村松紅花に宛てた増田恆河の手紙から始まっている。その内容は、高野素十の死で終刊になった『芹』に代わり、『雪』という俳誌が誕生したことを喜んだものである。村松紅花は、この増田の手紙の紹介によって高野素十逝去の悲しみを日本在住の俳人だけでなくブラジル在住の佐藤念腹門下の俳人たちも共有していることを示し、この雑誌が日本国内だけでなくブラジルにも目を向けていることを宣言する。またこの巻頭言からは、すでに『雪』創刊の時点で増田恆河と村松紅花の間に深いつながりがあったことがうかがえる。

村松紅花（一九二一～二〇〇九）は、長野県生まれ、本名友次、俳人・俳文学者であった。小諸疎開時に高浜虚子に師事、

その後高野素十に師事した。『ホトトギス』同人であり、俳誌『雪』の主宰を創刊号から二〇〇五（平成十七）年一〇月号通巻三三七号まで務めた。近世俳文学を専門に研究し、芭蕉・蕪村の研究に多くの業績がある。戦前、満州鉄道に就職しハルビン市に派遣され、ロシア語を習得した経験を持つ。

『雪』には、国際色豊かな記事が多かった。村松の方針によるものと思われる。ブラジルの同人の投稿・たよりは言うまでもなく、アメリカハイクの紹介、R・H・ブライスの紹介した素十の俳句、リヒテルズ直子のオランダ歳時記連載などがあった。また、村松が翻訳したR・H・ブライス著『俳句』は、『雪』一九八八（昭和六十三）年九月号より一九九九（平成十一）年一〇月号まで五十八回にわたって連載されたものである。[6] このような『雪』の国際性は、増田恆河がブラジルハイカイに関わるきっかけに影響を与えていただろう。また、村松を含めた『雪』の同人一行が一九八二年と一九九一年の二回、ブラジルを訪れていることも特筆すべきである。

これらの国際的な記事の中で、増田恆河の記事の多さは突出している。筆者の調査によると、増田恆河の投句は一九七七年の創刊号から二〇〇四年までほぼ毎号、エッセイの投稿は二〇〇五年ごろまで確認できる。投句を除く増田恆河の記事の掲載回数は一八〇回、その内訳は、増田恆河から村松紅花に宛てた手紙二十七、ブラジルハイカイについての報告記事四十七、論考の連載（他雑誌からの転載含む）二十二、雑文・エッセイ二十九、連句鑑賞三、ブラジル連句五十二である。[7] このうち、論考の連載、ブラジル連句に関するものは本論文では対象外とし、村松紅花宛の手紙、ブラジルハイカイについての報告記事、雑文・エッセイを主な検討対象とする。

なお、ブラジルハイカイについての報告記事は、ほとんどがブラジルの邦字新聞からの転載と思われる。四十七件のうち二〇件は日伯毎日新聞からの転載である。[8] 残り二十七件のうち二十三件は出典が明示されていないが、文体の類似から日伯毎日新聞の転載と思われる。

三　「ブラジル季語」の概念

高浜虚子は昭和十一年の渡欧の折に、他国にも独特の自然があるので俳句を移植するのは可能だ、と述べつつ、他方ではフランス、アメリカ、台湾の歳時記を作ってもいいが日本の歳時記を中心にすべきだ、とも述べている。[9] しかし現地の俳人からすれば、外国で現地に合わせた季語を作ろうとしても季語は扱いが難しくあまり重視されない傾向にある。[10] 俳句の国際化を推進するにあたって、日本の季語をそのまま押し付けることはできない、という指摘は佐藤（一九九五）、「松山宣言」（有馬他

一九九九）などいくつかあるが、それを実践とともに理論化した点が、増田恆河のブラジルハイカイへの貢献であり、世界的に見て他国に見られない展開である。[11]

増田恆河は、一九九四年に「ブラジルにおけるハイカイの近況」（『俳句文学館紀要』八）、一九九六年に「ブラジルにおけるハイカイの季語」（『俳句文学館紀要』九）の二論文を発表する。これらは、一九八六年以降のグレミオ・ハイカイ・イペーの活動史を中心にブラジルハイカイの近況をまとめたものである。白石（二〇二一b）によれば、二論文で繰り返し述べられている増田の季語についての理念は「ハイカイは日本の模倣ではなく、ブラジルの自然を諷詠するブラジルの短詩である」というものである。

増田恆河はなぜこのような季語論を持つに至ったのだろうか。本章では、最初に彼の季語論の前提となる、日系俳句における「ブラジル季語」という概念について先行研究と『雪』に依拠しながら整理したい。

「ブラジル季語」とは、簡単に言えばブラジル独自の自然・風物を取り入れた季語である。藤原マリ子は、佐藤牛童子編『ブラジル歳時記』（サンパウロ、日毎叢書、二〇〇六年）を日本の歳時記と比較し詳細な分析を行った。総季題数の約三分の一がブラジル独自の季題で、「イペー（花の名前）」「ピラルクー（魚の名前）」などブラジル特有の動植物、「雨季」「南十字星」などブラジル特有の気候、天文、「初ミサ」「奴隷解放の日」などキリスト教・ブラジルの記念日、「念腹忌」のようなブラジル俳人の忌日などを挙げている。[12]細川周平は、俳句界に伝承された季節感によって日系移民が新しい風土を解釈し、自分たちのものに咀嚼し、詩的言語の体系に取り込むことによってブラジル季語が成立したのだとする。亜熱帯の動植物や行事だけでなく、コーヒー・綿花栽培などの農事の季語をブラジル季語として挙げている。「ブラジル季語は日本から見れば異国趣味だが、ブラジルから見れば母国の俳句体系からの小さな離陸である」と細川は述べる。[13]

つまり、ブラジル季語は、日系移民が日本の俳人の眼差しでブラジルの自然から見出した季語の体系だと言える。しかもそれは、日本人の海外詠とは異なり、年月をかけて言葉を集団（日系社会あるいは結社）で内化してきたものである。佐藤念腹は一九四八年に『木蔭』を創刊した際、戦前の『ホトトギス』の編集方針に倣い「季題研究」の頁を設けた。さらに、『木蔭』二〇〇号（第十七巻八号、一九六五年七月）を節目に、『ホトトギス雑詠選集』と同様の『木蔭雑詠選集』と、『虚子編新歳時記』を参考とした念腹編『ブラジル歳時記』の編纂を目指した。ブラジル季語は、結社でのブラジル季題候補の提案、ブラ

ジル季題での投句と季題の選抜、季題解説の地道な積み重ねのサイクルによって生まれている。その経緯は蒲原宏『畑打って俳諧国を拓くべし―佐藤念腹評伝』（新潟市、大創パブリッシング、二〇二〇年）に詳しい。

『雪』では、創刊当初から村松紅花が日系ブラジル人の同人の投句を理解するために「個人的な希望であるが、ブラジル季語集もしくはブラジル歳時記のようなものはないだろうか」（『雪』二号、一九七七年十一月）と発言している。また「放牧」「オリオン」など新しい季語の提案（『雪』四号、一九七八年一月、七号、一九七八年四月）を行うなど、ブラジル季語への強い関心を示している記述も見られる。

このように「ブラジル季語」への関心が日本の結社『雪』にも共有・継承されていたことは非常に興味深い。『雪』の選集である『雪　春夏秋冬』（東京、永田書房、一九九二年）には、番外編的に「ブラジル季語編」としてブラジル季語の項目と例句が八頁（四〇七～四一四頁）掲載されている。以下、同書よりいくつか季語と例句を紹介する。

秋　新ピンガ　日雇の機嫌直りし新ピンガ　栗原てる子
冬　珈琲採り　霜焼けの枝をいたはり珈琲もぐ　佐藤孝子
春　獏の恋　水牛にぶつかりもして獏の恋　大熊秋楓子
夏　マンガ　混血も詮なかりしよマンガ熟る　栗原義人堂

四季は秋（二月）から始まっている。一句目、「ピンガ」はブラジルの代表的な酒で、日本の季語の「新酒」をイメージした季語。二句目、「珈琲」はカフェーと三拍で読む。ブラジル移民の農作業の様子を詠む。三句目は、猫の恋を転じた「獏の恋」。四句目の「マンガ」はマンゴー。恣意的に選んだが、どれも日本的な視点から季語が見出され、かつブラジル的な季節感や取り合わせの妙がうかがえる。

一九八一年には、『木蔭』『雪』の同人である梶本北民の『ブラジル季寄せ』（サンパウロ、日伯毎日新聞社、一九八一年）が刊行された。この『ブラジル季寄せ』は、ブラジル季題に星印をつけている点が画期的である。[14]『雪』四十九号（一九八一年一〇月）の記事（村松紅花による著書紹介）で、村松は『ブラジル季寄せ』を次のように評している。

一年の季節や行事の移り変りに詩を感じ、詠うという日本の文化が、こういう書物（やがてポルトガル語に訳されたりして）によってブラジル人の興味を引き、ブラジル文化の一異彩としてとり入れられる日も来るであろう。

著者梶本北民氏が考えている以上に、これは大きな文化的事業である。（九十八頁）

村松は日本文化がブラジル文化の一部となる日を予想し、この歳時記を日系俳句や日系社会側からの視点からだけでなくブラジル側からの視点でも評価している。村松には他にも「ブラジル文化」という表現を使用している箇所がある。『雪』四十四号（一九八一年五月）巻頭言には、ブラジルに俳句が生きのび「日本文化が浸透することはブラジル文化の多様化のためにも好ましい」と述べ、ブラジルでの俳句の普及が日系人のためだけでなくブラジルの文化にも貢献するとの見方を示す。

村松のブラジル側からの視点というのは、俳句の国際化に早くから関心を抱いていた村松ならではの視点ではないだろうか。例えば、佐藤念腹編『木蔭雑詠選集』（一九七九）の「あとがき」には、「亜熱帯育ちのブラジル人は、元々季節の変化などに気が付かず（中略）私は曾て、ブラジルの四季は日本移民が発見したと言ったが、俳句の季題をブラジルに開発したのも、我々日本移民ということになる」とある。このように日本の移民の文化として俳句を誇る言説は見られるが、俳句をブラジル文化への貢献とする言説はブラジル日系移民にはこれまで見られなかった。念腹を含め移民の多くはブラジルに住みながら望郷の念で日本の方向を向いていた。それに対し、前段落で触れた日本の村松の視点が、前掲「ブラジルのハイカイ」の引用にある「俳句の『ブラジル化』」や後で論じる増田恆河の季語論につながっているのではないかと思われる。

四　増田恆河の季語論の変容と『雪』の関わり

前章で述べたように、「ブラジル季語」は、日系移民の視点から体系づけられた季語であるが、そのアイデンティティの所在は複雑である。虚子の伝統俳句（＝花鳥諷詠）的な視点から日本語で句詠する点では日本由来のアイデンティティが強いが、見出されたものはブラジルの自然でありブラジル生活の営みである。増田はコロニア俳句（日系俳句）で使われているのは、日本語ではなくコロニア語、つまりポルトガル語と日本語のピジンであり、カタカナで表記されたポルトガル語はもはや外来語ではなく日本人にとっての日本語と同じである、と述べている（「ポ句は花盛り」『雪』五十八号、一九八二年七月）。増田恆河はブラジルハイカイに花鳥諷詠を移植するにあたり、日系俳句やブラジルハイカイをどのような視点でみていたのだろうか。

一九八七年の村松宛年賀状である増田恆河「ブラジル便り」（『雪』一一五号、一九八七年四月）には、一九八六年の十二月に行われた第一回ハイカイ集会の様子を報告した後、次のよ

うに述べている。

私が予想しましたブラジルにおけるハイカイの流行が意外に早く始まりまして驚いております。つきましては、出来る限り「有季ハイカイ」を根付けて置きたいと思いますので、もし虚子先生の俳論（英文、または仏文）がありましたら、コピーをお送り頂きたく、それを翻訳しまして広く紹介致したいと希っております。

この発言からは、虚子の文献入手を依頼するなど、日本側の視点でブラジルに有季ハイカイを「根付ける」と述べ、日本俳句の視点をそのままブラジルハイカイに持ち込もうとする意図が見られる。

一方、「ブラジルにおけるハイカイの季語」（一九九六）には、次のようなエピソードが紹介されている。一九八七年四月のグレミオ・ハイカイ・イペーの例会で、季語とは何か、との質問を受け、増田が「四季を代表する季節の言葉」と説明すると、「ブラジルには日本のような四季がない。サンパウロでは朝昼晩と気温の差が激しく、いわば、一日の中に四季があるようなものだ」と反駁された。そこで増田は、次の例会で左のようなやりとりをする。

次の例会に出席した折、年間に一度だけしか起らない事象について質問することにした。

まず、ブラジル人が最も愛好するイペー（国花）をとりあげ「イペーは年間に何回咲くか」と訊いたところ、「一回だ」と異口同音に答えた。「では、いつごろ咲くか」と尋ねたら、「8月から9月にかけて咲き、独立記念日（9月7日）前後が最も美しい」という。「9月は夏ですか」という質問には、考えた末に「春だ」との回答があった。次には「ナタル（クリスマス）は年に何回あるか」とわざととぼけた質問をしたところ、「1回に決まっているではないか」と叱責された。「ではナタルは寒い季節か」との問いには、「冗談じゃない。12月25日の暑い盛りだ」と、愚問を笑われた。そこで、念のために、「パイネイラ（木綿樹）はいつごろ咲くか」「ジュニーナ祭（六月祭）は…」と問いかけたところ、それぞれ「秋だ」「冬だ」という答えが返ってきた。つまり、イペーは春季、ナタルは夏季、パイネイラは秋季、ジュニーナ祭は冬季ということになったのである。このとき、「季語というのは、イペー、ナタル、パイネイラ、ジュニーナ祭のように、それぞれの季節を代表する自然現象や行事を指すのである。」と解説したので、出席者一同が納得した。（四～五頁）

グレミオ・ハイカイ・イペーのメンバーは、増田恆河以外は日系二世または非日系（日系以外の）ブラジル人であり、右のやりとりはポルトガル語で議論していたと思われる。この報告を読むと、ブラジルハイカイに季語を持ち込むにあたって、ブラジル人に季語の概念がなかなか理解されなかった様子がうかがえる。グレミオ・ハイカイ・イペーは、ハイカイ（ポルトガル語の俳句）についての研究会だったのだが、季語研究を深めるうちに、季題のハイカイを持ち寄る「コロニアでおこなわれている俳句会と同じ形式の句会」（「柿育つごとく……伝統俳句のブラジル化」『雪』一五五号、一九九〇年八月）も並行して行われた。念腹の古くからの門人である増田は、前章で説明した『木蔭』での季題研究の方法をここで踏襲しているといえる。さらに、「日本人が及びもつかぬ着想の句が現れるので非常に面白い。これをつづけることによって、いわゆるハイカイスタの間の季題に関する概念が次第に浸透することが予想されている」（『雪』一五五号）と述べている。

日本ではなくブラジルの視点からの言説が現れてくるのは、日系人の日本へのデカセギブームが起こる一九九〇年頃からである。増田恆河「俳句による国際交流」（『雪』一六三号、一九九一年四月、一九九〇年六月二十九日記）には、ブラジルハイカイは日本の俳句の模倣ではない、ブラジルの自然を通して生まれる花鳥諷詠詩であり、日本的態度を避けるべき、と述べている。[15]

一九九一年には、増田恆河の有季ブラジルハイカイの活動に影響を与えた『雪』関連の二つの出来事があった。一つは、『雪』一六二号（一九九一年三月）の村松紅花の巻頭言である。「外国人に季語をどう説明するか」というタイトルで、俳句が自然賛美の詩であると同時に無常の文学である、と述べたあと、さらに次のように続ける。

> ある人から俳句に季語が必要なことを、外国人にどう説明すればよいか、という質問を受けた。右のように答えてみてはどうだろうか。その場合、四つの季節を峻別する必要はない。乾季と雨季という二季の地方もあるだろうし、三季の地方もあるだろう。
>
> 要は自然界の運行の中で、その開落生起する現象を介して自己の感情を詠う。それは大自然を前にした極小の自己を詠う詩であり、一転して大自然と一体となった、永遠の生命の歓びを詠う詩である、と説いてはどうだろうか。

「ある人」が増田恆河を指すことはほぼ間違いないだろう。内容的にブラジルを意識した発言である。村松の巻頭言は、グ

レミオ・ハイカイ・イペーの四季別選集『四季』（*'As Quatro Estações'*,1991）の序文に引用されており、グレミオ・ハイカイ・イペーの季語の考え方に影響を与えている。「無常の文学」「大自然と一体」という考え方は、『雪』で連載されていたブライスの思想に近く、海外で受け入れられやすいと思われる。

もう一つの出来事は、二度目の『雪』一団の訪伯（八月二十三日～九月六日）である。村松も同行しており、ポルトガル語の日本文化紹介雑誌『ポルタール』一九九一年十一・十二月号に、ハイカイと季語についての村松紅花へのインタビュー記事が掲載された。それを増田が日本語訳した記事（「キゴロジーア（季語論）」）が『雪』一七六号（一九九二年五月）にある。非日本人も季語を知る必要があること、いかなる文化の中でも季語が発達することなどの村松の発言が紹介されている。

村松の巻頭言・インタビュー記事での発言は、この後増田が述べている、ブラジルのハイカイはブラジルの自然を詠む短詩である、という主張に重なる部分が多い。これは村松の発言が増田の季語論をエンパワーしたと評価できるのではないだろうか。『雪』一七六号によれば、インタビュー記事がブラジルの雑誌『ポルタール』に掲載されたときの反響は大きかったそうだ。第三章で述べた「ブラジル文化」の視点も含め、村松紅花が増田の季語論形成に与えた影響は大きいと言えよう。

増田恆河は、当初、日系俳句雑誌『木蔭』の花鳥諷詠（季語重視）の考え方を継承し、それをブラジルハイカイにそのまま移植しようとした。しかし、グレミオ・ハイカイ・イペーでの季語研究のやりとりを通して、日本の季語の模倣や押し付けではなくブラジル側の視点からブラジルの自然を詠むのがハイカイだ、という意識が生まれ、増田の季語論が形成された。そのプロセスが、『雪』における増田恆河の記事から読み取れる。また、主宰村松紅花の存在や俳句雑誌『雪』の国際的な雰囲気が増田の季語論の変容を促す触媒として機能したのである。

五　二つの歳時記と有季ブラジルハイカイの季語観

増田恆河の季語論としては、「ブラジルにおけるハイカイの近況」「ブラジルにおけるハイカイの季語」の他に、増田恆河編日本語歳時記『自然諷詠』の中にある「ブラジルの季語」という評論がある。そこでは、ブラジルの季語について次のように述べる。雷という季語は日本の季語にもあるが、ブラジルの雷と日本の雷は違うから「雷」の語の解釈が日本とブラジルで異なる。ブラジル特有の季語だけでなく日本の季語も、すべてブラジルではブラジル季語と称することができるのだ、と主張する。さらに最後に、ブラジルのハイカイ発展のためにも季語の研究が重要で、ブラジル文化の向上に寄与したい、とブラジ

ル側からの視点の叙述で締め括る。日系俳句の歳時記の文脈の中での発言だが、増田の有季ブラジルハイカイでの活動が反映された内容となっている。季語にポルトガル語をつけ秋や一月ではなく春から始めるのは、これまでの日本語ブラジル歳時記にはない特色であり、ブラジル文化全体を意識している。藤原や細川はこの論を日系俳句の視点から意味づけて分析しているが、増田のこの論は、ブラジルハイカイの側から「ブラジル季語」を位置付けた論として読まねばならないというのが筆者の立場である。

増田恆河の有季ブラジルハイカイにおける季語論としては、ポルトガル語歳時記『*Natureza- Berço Do Haicai*』巻末の評論がある。そこでは、"O haiku é o poema que canta em louvor da natureza do Japão. O haicai é o poema que canta em louvor da natureza do Brasil. Por isso, o haicai não é copia do haiku."（*Natureza*;p.259）（俳句は日本の自然を称賛して歌う詩だ。ハイカイはブラジルの自然を称賛して歌う詩だ。だから、ハイカイは俳句の模写ではないのだ。）と、日本の俳句とブラジルハイカイを明確に区別して扱っている。また続いて、"O nosso haicai tem sua própria identidade, do ponto de vista do tema, da métrica e do conteúdo. Porque a origem do tema do haicai reside nas peculiaridades da natureza brasileira, para cada qual se associa um termo de estação, ou seja, o kigo (em japonês)."（*Natureza*;p.259）（私たちのハイカイはテーマ、韻律と、内容の面をみて特定のアイデンティティーをもっている。ハイカイのテーマのもとにブラジルの自然があるからこそ、各ハイカイに季節の言葉（日本語で）季語が付いている。）と、グレミオ・ハイカイ・イペーのハイカイのアイデンティティがブラジルの自然・季語にあることを強調している。ここからも日系俳句側からブラジルハイカイ側への増田の視点の転換がうかがえる。

『俳句文学館紀要』八、九号と『自然諷詠』、『*Natureza*』が出版されたのは、一九九四年から一九九六年にかけてである。これらは彼の有季ブラジルハイカイの活動から生まれた理論および実践の大きな成果である。一九九七年以降の「根を下ろした季語」（『雪』二三九号、一九九七年八月）、「大地に育つハイカイ」（二四一号、一九九七年一〇月）などの増田恆河の記事からは、有季ハイカイが「細根ながらもしっかりと大地に根づいた」（二三九号）実感を得た自信が読み取れる。「俳句は世界の詩である」（二四四号、一九九八年一月）では、「〝日本文化の鋳型〟としての俳句をそのまま押し付けるのではなく、それぞれの国の自然（季語）を発見して」ハイクを普及すべきだという持論を繰り返しつつ、ヨーロッパ文化圏で最初に季語が根づ

いたのがブラジルである、と言い切る。

グレミオ・ハイカイ・イペーの作品を二つ紹介する。

Libélula voando　　飛んでいるトンボ
pára um instante e lança　　一瞬止まって地面に
sua sombra no chão　　影を落としている

Doce e tenro o inhame-　　甘くて柔らかい里芋-
Saudade até do avô　　祖父が恋しい
De pouco sorrir　　笑顔が少ない（祖父）

一句目は増田恆河の作品である。本人訳は「飛ぶ蜻蛉止まる一瞬影を地に」である。ポルトガル語歳時記『*Natureza*』にlibélula（秋・動物）の例句として掲載されている。『雪』二九一号（二〇〇一年十二月）でも村松が紹介している。二句目は増田の後を引き継いでグレミオ・ハイカイ・イペーを主導するオダ・テルコ（一九四五〜）の『わがふるさとのうた』（'*Waga furusato no uta:Canção da terra natal*'.2015）という作品からの引用である。一行目末のダッシュはブラジルハイカイでは切れ字の役割をしていると思われる。増田の死後、グレミオ・ハイカイ・イペーの活動は増田の姪オダ・テルコを中心に受け継がれている。ブラジル全土に多くのハイカイ・グループが誕生し、句集の出版や子どものハイカイ教育など幅広い活動が行われている（二〇二一年現在）。日本語を話す一世移民の世代がほとんど去り日系俳句を含むブラジル日系文学が萎みゆく中、有季ブラジルハイカイは、日本語が話せなくなった日系二世、三世だけでなく非日系ブラジル人も参加できるブラジルの文芸、文化として継承されている。これは増田恆河の功績と言えるのではないか。

六　本論文の意義と今後の課題

以上、日本の俳句雑誌『雪』で得られた情報をもとに、増田恆河の季語論形成における思想の変遷過程を分析してきた。その結果、グレミオ・ハイカイ・イペーでの活動において日系二世や非日系ブラジル人との対話を通して増田の季語論が変容し、ブラジル側の視点に立脚した季語論を形成したこと、さらにそのプロセスで日本の俳句雑誌『雪』および主宰村松紅花が影響を与えていたことを明らかにした。

本論文の意義は、本格的な有季の国際ハイクがブラジルに根付いていること、またそこに日本移民が日本からの支援を受けながら仲介行為を行なっていた点を明らかにしたことである。日系人が国際ハイクに関わる事例はアルゼンチンやアメリカ合

衆国にも見られる。そこでもやはり母国日本の俳壇との関わりが指摘されている。[16] アルゼンチンは日系社会の規模が小さく、またアメリカはハワイなどの地域限定での活動である。アルゼンチンとスペインでは、日本人研究者が介入してその国の歳時記を構築する動きがあり、国際ハイクとして注目すべき展開であるが、ブラジルほど有季ハイクが根付いているとは言えない。[17]

日本人がいくら現地に合わせた季語を許容したとしても、季語はその国の自然と伝統的な詩歌の蓄積からなる体系であり、『木陰』の例のように集団での地道な努力を必要とする。言語が異なればなおさら、現地の人だけで季語を作るには困難が伴う。有季の良し悪しはさておき、季語を持ち自然を詠む国際ハイクのあり方が日系人の仲介あるいは日本人の支援によって展開する流れは国際ハイクの可能性を拓くものである。また、移民の側から言えば、世代を経るにつれ日本語よりポルトガル語が優勢となる中でポルトガル語の文学として非日系の人を巻き込みながらハイカイ（俳句）という文化を継承することには大きな意義がある。そういう意味で、ブラジルハイカイにおける増田恆河の仲介行為の事例は世界に例がない。

今後の課題としては、日本語文献だけでなくポルトガル語文献から実作や評論を詳細に分析することが挙げられる。

増田恆河のブラジルハイカイにおける活動が日本の俳句雑誌によって報告されているのは、単なる偶然ではない。増田の季語論を『雪』の記事、手紙、訪伯などでエンパワーメントしていた村松紅花の果たした役割は大きい。村松紅花もまたブラジル文化に寄与したと言えるのではないか。増田恆河にとって『雪』は、日本のアイデンティティの拠り所であると同時に、日本文化の押し付けではなくブラジル側からの視点やグローバルな視点が導かれ文化の共創を醸成する場であった。

注

（1） 高野素十・佐藤念腹と関係の深い中田みずほも一九七五年八月に逝去、中田主宰の俳誌『まはぎ』から『雪』に合流した人も多かった。

（2） H.Goga Masuda, e Teruko Oda, *Natureza: Berço Do Haicai Kigologia e Antologia*（São Paulo: Empresa Jornalica Diario Nippak Ltda; 1996）日本語訳は『自然―ハイカイの揺籃　季語集と例句集』。

（3） エレナ・H・トイダ、「ブラジルにおける俳句の歩み：「桜の花」から「イペーの花」へ〈特集　ラテンアメリカに受容されたHAIKU〉」、『イベロアメリカ研究』、五十八号、二〇〇八年八月、九～二十二頁。久冨木原玲、「ブラジルにおけるハイカイ研究の現在―日本文化の受

容・展開の一様相」『愛知県立大学日本文化学部論集』、第九号、二〇一八年三月、一二八～八十七頁。久冨木原玲、「日本の俳諧・俳句からブラジルのハイカイへ―日本文化の特異性と新展開」、『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』、六号、二〇二〇年三月、一三八～一二〇頁。

（4） 細川周平、「季語のない国―ブラジル季語をめぐって」、『日系ブラジル移民文学Ⅱ　日本語の長い旅［評論］』、（東京、みすず書房、二〇一三年）六〇一～六五〇頁。藤原マリ子、「ブラジルの歳時記―成立の経緯と特徴―」、『国際歳時記における比較研究　浮遊する四季のことば』、東聖子・藤原マリ子編、（東京、笠間書院、二〇一二年）、三八六～四〇八頁。

（5） 白石佳和、「『自然諷詠』とKigologiaをめぐって―日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割」、*Múltiplas faces de pesquisa japonesa internacional: integralização e Convergência.* 1. ed., MUKAI, Yuki; PINHEIRO, Kimiko Uchigasaki; LIRA, Kaoru Tanaka de; LIRA, Marcus Tanaka de; TAKANO, Yuko (org.). (Campinas: Pontes Editores, in press:2021) pp.251-266（二〇二一 a）。白石佳和、「季語をめぐる国際ハイクのオーセンティシティについての考察―ブラジルハイカイにおける増田恆河の仲介行為を例に―」、『人間社会環境研究』、第四十二号（二〇二一年九月）、四十九～六十五頁（二〇二一 b）。

（6） R・H・ブライス著、『俳句』、村松友次・三石庸子共訳、永田書房、二〇〇四年。原書はBlyth, Reginald Horace. *HAIKU Volume1 Eastern Culture*. Tokyo: Hokuseido Press, 1949.

（7） 新潟市立中央図書館、新潟県立図書館において『雪』のバックナンバーを、創刊号から三四〇号（二〇〇六年一月号）まで調査。

（8） 一九四九年創立のサンパウロ市の日系新聞。一九九八年にパウリスタ新聞と合併しニッケイ新聞となる。

（9） 高浜虚子、『渡仏日記』、（東京、改造社、一九三六年）、四六八頁。高浜虚子、「熱帯季題小論補遺」、『俳論・俳話集二』、第十一巻、定本高濱虚子全集、全十五巻、（一九三六年、東京、毎日新聞社、一九七四年）、三一三頁。細川（二〇一三）にも熱帯季語について虚子の論についての言及がある。

（10） 拙著（二〇二一 b）五十一頁参照。なお、世界各国の歳時記・季語への取り組みの状況は五十二～五十四頁参照。現地に合わせた季語を活用するよう日本人が提唱し

ても、現地で実践するのは難しかった。

(11) 佐藤和夫、「西洋人と俳句の理解―アメリカを中心に」、『日本語学』第十四巻第一号（一九九五年一月）、十五頁。有馬朗人・芳賀徹・上田真・金子兜太・ジャン＝ジャック・オリガス・宗左近、「松山宣言」、http://fukiosho.org/archive/reference/Matsuyama_Declaration_Japanese.pdf、1999（2022.1.26確認）、四頁。

(12) 前掲藤原（二〇一二）、四〇〇～四〇五頁。なお本論文では季題と季語の区別の問題は扱わない。

(13) 前掲細川（二〇一三）、六〇三頁。

(14) 前掲細川（二〇一三）六一八頁。

(15) 記事の説明がないが、『日伯毎日新聞』の増田恆河担当のコラム「ハイカイ通信」からの転載と思われる。

(16) 井尻香代子、『アルゼンチンに渡った俳句』、（東京、丸善プラネット、二〇一九年）、十二～十三頁。シェーロ・クラウリー、「アメリカの俳句における季語」、マカート純子翻訳、『国際歳時記における比較研究　浮遊する四季のことば』、東聖子・藤原マリ子編、（東京、笠間書院、二〇一二年）、一六八～一六九頁。

(17) 前掲井尻（二〇一九）、一三二～一四五頁。Seiko Ota y Elena Gallego, *Kigo - La palabra de estación en el haiku japonês*, (Madrid:Poesia Hiperion,2013)

【付記】本論文は科学研究費補助金基盤研究（B）「ブラジル国際俳句の多様性とラディカルな展開　日本韻文史とのかかわりから　」（課題番号二一H〇〇五二〇）の交付を受けて行った研究成果の一部である。また、エウニセ・スエナガ氏、向井裕樹氏に研究資料の提供や文献翻訳のご協力をいただいたことに感謝申し上げる。